

小袋谷あれこれ

小袋谷の地名について

小袋谷の地名を見ることが出来る一番古い文献は、徳川家康が江戸幕府を開く百年以上前の、円覚寺塔頭雲頂菴に残る一五〇一年の文書で「巨福礼谷」と書かれています。箱根神社所蔵の一五一九年の文書には「小ふくろや」と書かれ、その四十年後の一五五九年の小田原北条分限帳に「小袋谷」と漢字で小袋谷の表記が初めて出てきます。

戦国時代以前の文書には谷の字がついていない名が散見できます。鎌倉時代の史書である吾妻鏡一二四一年の箇所には「巨福礼」と載っています。一二八四年の円覚寺所蔵文書には「小福礼」と書かれています。一三四七年に撰文された建長興國禅寺碑文の中に「巨福礼郷」と書かれこの郷名から建長寺の山号を「巨福山」としたと記されています。この山号から建長寺辺りの字名は巨福山となりました。北條氏照の一五八一年の文書には「小袋之郷」と書かれています。巨福礼郷と言われた地域は、当初は小袋谷だけでなく山ノ内や台の市場、粟船山の辺りまで含んでいたようです。

鎌倉時代の巨福礼（小福礼）から小袋谷に表記が定まるまで歴史の中でさまざまな原因により巨福呂、巨福路、巨福などいろいろな表記をされてきました。この元々の原因は巨福礼郷のそばに小袋坂があったからではないでしょうか。巨福礼と小袋坂の地名の由来に関係はないと思いますが、小袋坂についても調べてみますと、新編鎌倉志には雪ノ下から建長寺前へ出る切通しと書かれております。雪ノ下には小袋坂という小字名があり、坂の頂上が村境でした。吾妻鏡一二三五

年の箇所には「小袋坂」が鎌倉の北の境として載っています。一遍聖絵には「こふくろさか」で上人が追い返されたと記されています。古典文学作品の太平記には鎌倉幕府が倒される一三三三年の戦に「巨福呂坂」に討幕軍を指し向けたと出てきます。しかし新編鎌倉志には、場所を「巨福呂谷」と間違えて記載していると書かれています。この混同と誤記がいろいろな表記を生んだと思います。

小袋谷の地名の由来について触れた文献はほとんどありません。皇国地誌には言い伝えとして、巨福呂坂の路筋の低地なるを以て巨福路谷と名付くと載っています。巨福礼について、峠から見た山並みを巨富が連なっている様に見立てた瑞祥地名と書いている地名辞典が一つだけありましたが、古代中世の領主にとって富とは米がたくさん収穫できる土地のことではないでしょうか。

小袋谷のアタマにある小（コ）は接頭語です。袋（フクロ）の語源を調べてみますと、膨れる、膨らむという意味の古語「フクル」から派生した「フクラ」や「フクレ」と同根かもしれません。「フクロ」はまた、池川などの水に囲まれた袋状の地形という意味も持っているそうです。そして、中国古代の膨らむという意味の語が変化した漢字の中には、富や福があります。アイヌ語では袋のことをプクロと言うなど似た言葉があります。谷（ヤ）はタニの意味でなく、ヤヤヤツの意味（低湿地、湿泥地）でアイヌ語のヤチと同義です。

小袋谷は以前小袋谷川、梅田川、柏尾川に三方を囲まれた袋状の地形でした。しかし、鎌倉市が一九六七年に住居表示の変更を行い小袋谷地域の範囲を狭めたため、いま小袋谷は三方を道路に囲まれた細長い形の地域となっています。